

歴史と文学の宿

旧街道・歴史の舞台・文人ゆかりの宿220



交通公社のMOOK 日本の宿シリーズ3

越後高田の 長養館

山崎朋子



女性史研究者

越後高田へ行くことがあったら、街道の西側に軒をならべているという昔風の宿屋に、泊ってみたいものだと思っていた。

二十歳を過ぎたばかりだったわたしの夫が、はじめてのひとり旅で高田を訪ねたときのことだけれど、立派な宿は宿泊料が高いにちがいないと、選りに選ってもっとも古くて質素な旅館の敷居をまたいだという。通されたのは次の間を入れると二十畳もありそうな座敷で、そこへひとり寝かされて、さて、夜中ふっと目覚めたら、一間半もある床の間に大きな大きな虎の絵が掛かっている。そして、その虎がこちらを睨んでいるのだけれど、「ああ、江戸時代の旅人たちも、こうやってひとり夜中にめざめて、この猫をでっかくしたみたいなきつねの絵を見たのかなあ」と思ったら、何ともやるせなくなっていました。

この話を聞いて、わたしは、北国街道が南北に分れるところにある町、江戸へ上方へまた佐渡へと旅人たちが急いで行った町である高田に、いかにも似つかわしいと感じてしま

った。そうして、何時かしら越後高田へ行く折があったら、その昔の商人宿、大きな大きな虎の絵の掛かっている旅館へ泊るんだ——と思っようになっちゃったのである。

しかし、わたしが初めて泊った高田の宿は、そこではなくて、今ではもっとも古くもっとも高い格式を誇る長養館という宿だった。それも、もう、十五年も昔のことになると思う。

夏休みの家族旅行で佐渡へ渡ったのだが、着くと同時に娘が高熱を出してしまい、泊った民宿から医者へ通っただけで、金山も海府の海も見なかった。幸い大したこともなくて済んだので船で直江津へ出て、知人のいる高田で求めた宿が長養館だったのである。高田駅のすぐの裏手、高田の景観の特徴をなすといわれる杉の木立にかこまれた和風の宿で、庭の苔の美しさが今も忘れられない。夫の友人で児童文学作家の杉みき子さんとはじめて顔を合わせたのも、この時、この長養館の部屋だった。そして、その折の杉さんの話によると、何とこの長養館は彼女の親戚にあたり、彼女は小学生のときこの親戚にあつた小川未明の童話集を読み、未明が高田の出身としても彼女の通っている大手町小学校の卒業生であるを知り、それで感激して童話作家を志したのであるということだ。

わたしは、ここ五、六年というものの高田の土を踏んでいない。農山村の過疎化した分だけ都市およびその近郊が急速に変化する現代だから、越後の三天平野のうちのひとつの中心部にある高田にも、おそらくは変貌の風が吹いており、高田と直江津が合併して上越市などという名になったのもその現れなのだろうか。

非力なわたしには何をすることもできないのだけれど、心の裡で祈らないではいられないのである。——上杉謙信の居城があつたという春日山よ、その下につづいていた杉並木の美しい北国街道よ、変らないでいておくれ、そして長養館の庭のあの美しい苔の色よ、何時までもそのままであっておくれ、と。